

## 序 章 社長の用件

ヒステリックなベルの音が右耳に突き刺さり、頭蓋骨の中で乱反響する。慌てて布団から手だけを出し、その元凶の在り処を探る。凍てついたシーツの表面を這い、冷たい空気中をさ迷い、ようやく、中指と薬指が角張ったプラスチックの塊を捉える。そのままよじ登り、天辺にある丸いボタンを押し込む。

リッ、という一打を最後に、目覚まし時計は沈黙した。毎朝のことながら、このリアルなベルの音は心臓に悪い。息苦しくなるほど脈が速く打っている。しかも今朝は、どういふわけか全身の筋肉が強張っていて、寝起きとは思えない疲労感がある。何か悪い夢でも見たのだろうか。ワニに追いかけられたとか。ビルから落ちたとか。いきなり智之に別れ話を切り出されたとか――。

梢惠はうつ伏せのまま膝を折り畳み、布団の中で亀になった。その姿勢のまま十分ほどじっとしておく。こうしていると眠気が徐々に薄れていき、会社にいかなければという焦

りが適度に湧き上がってくる。十分経ったら、とりあえず洗顔。これに三分。その間に淹れたコーヒーを飲むのに五分。歯を磨いて、化粧と着替えに十分か十五分。アパートから北千住の駅までは速歩きで十分強。遅くとも八時十四分の日比谷線に乗れば、八時半には会社に着く。

そう、会社。

理化学実験ガラス器機の専門メーカー、片山製作所かたやま。二年前、三流私大の理学部卒の梢恵を拾ってくれたありがたい会社。入社早々の会話で碌に大学時代に勉強してなかったことが明らかになっても、いまだにナス型フラスコと丸型フラスコを取り間違えても、試料管と冷却器を逆に接続しようとして両方破壊してしまっても、決してクビになどしないふとこころ。懐の深い会社。製品開発のための実験もできない、かといって切断や溶接、研磨といった加工業務も苦手な梢恵に、在庫管理と伝票整理という分かりやすい仕事を与えてくれ、なお給料を毎月くれる優しい会社。それが、片山製作所。

よく分かっている。自分が一方的に感謝しなければいけない立場にいるのは痛いくらい承知している。でも、駄目なのだ。

「……あー、会社いきたくない」

どうしても毎朝そう思ってしまう。実際、口に出していってしまう。ときには叫びながら枕を投げてしまう。はじめと泣きながら、今日はお腹が痛いことにしようかと考えて

しまう。本当は生理痛なんて滅多めったに感じたことはないのに。

まあ、今朝はそんなに大変ではなかった。目覚ましから十分経つ頃には、上半身を起こしてみてもいいかな、くらしいの心構えはできつつあった。

「よし……起きよう……起きましよう」

その宣言からゆっくり百数えて、ようやく上半身を起こし、正座になる。

「うん、起きた。私、いける……気がする」

ベッドのすぐ横、カラーボックスの上に乗せてあったメガネをかけ、さつき止めたデジタル式の目覚まし時計を改めて見る。

七時四十二分。まあ、そこそこ予定通りだ。

会社は荒川区あらかわく東日暮里二丁目。普通の戸建て住宅と、三階建てくらいのアパートと、金属加工とかの町工場を順番に並べたような街。片山製作所の社屋は、その中では高い部類に入る。六階建て。一見マンションか、アーチ形の窓がちよつとヤラしいから、ひよつとしたらラブホテルか、という外観をしているが、実はれっきとした工場である。

「おはようございまーす」

まず一階。手袋をはずし、入って左手の壁にあるカードホルダーから自分のものを抜き出し、タイムレコーダーに挿入する。記録された時刻は八時二十八分。いつも通りだ。

「おーい、瀬野ちゃん」

大型バイクくらいあるガラス加工用旋盤せんばんの陰から、ベテラン作業員の奥村おくむらが顔を覗のぞかせる。黒いTシャツに黒い作業ズボン。こんな朝早くから整備か。頬ほおにはもう黒い油污れがついている。

「おはようございます」

「なんか、社長さかが捜さがしてたぜ。話があるとかいってたけど」

「そう、ですか……分かりました。すぐいってみます」

それだけいって、いったん外に出る。雨の日はさすがにエレベーターを使うが、そうでなければ梢恵はたいがい外階段で六階まで上がる。理由は二つ。一つは健康のため。もう一つは、他の社員と一緒にならないため。別に彼らが嫌いとか、そういうことではない。むしろ逆だ。溶接用の遮光メガネしゃっこうを首から下げている彼らを見ると、自分が何もできない役立たずやくたはずに思えてきて嫌になるからだ。まあ、何もできない役立たずというのは事実だから、仕方ないといえばそうなのだけだ。

六階に着いた。

このフロアには下の階のように旋盤や溶接機材は置いていない。カウンター状の机が三台、等間隔に並んでおり、そこに形も大きさも様々な化学実験用のガラス器機がところせましとセッティングされている。要は実験室。落ちこぼれ理学部生だった梢恵には、到底

理解不能な論理や発想がここから生まれてくる、のだと思う。

フロアの左側、パーティションで仕切つてある部屋が会議室。その続きにあるのが社長室。

「失礼します」

会議室の入り口から声をかける。

「社長、おはようございます。瀬野です。……社長？」

返事も、気配もない。もともと社長室でじっとしていられる人ではない。またどうせ下のフロアで、この管をもっと細くしてみたらとか、角度をつけてみたらとか、作業員相手にその場での思いつきを提案して回っているのだろう。

仕方なく反対側、フロア右奥にある事務室に向かう。梢恵の定位置、というより、この社における唯一の居場所。入社当初は正直、この六階に社長と二人という状況が嫌で嫌で堪らなかつた。いうまでもなく、セクハラを受けるのではないかと心配していたのだ。がしかし、そんなことは一度として起こらなかつた。お尻を触られたことも、肩を揉まれたこともない。つまり、ここでの梢恵はそういう存在ですらない。ただし、パシツ、と後頭部を叩かれたことは七、八回あつた。うち二回くらいはメガネも飛んだ。

事務室に入り、それでも一応ドアノブのボタンを押し込んでロックする。梢恵も出社したら他の社員同様、片山製作所のロゴ入りTシャツに着替える。工場内は常に溶接やら切

断やらで火が使われているため、冬でもかなり暖かい。

でも、下はスカートかジーパンのまま。

梢恵は一切、作業らしい作業はいつけれないので、これでいいのだ。

昨日、梢恵が帰ったあとに持ち込まれたのであろう伝票をパソコンに入力していると、実験室の方から足音が近づいてきた。

「……なんだ、梢恵。いるんじゃないか」

社長の片山だった。饅頭まんじゅうみたいな丸顔に無精ヒゲ。だいぶ薄くなった脳天を隠すためか、最近をよくニットキャップをかぶっている。

「いますよ。ちゃんと八時半にはきてました……ああ、おはようございます」

「ちつとこい」

片山はそろそろ五十歳。基本的に会話は噛み合か合わないものと諦あきらめている。

「……はい」

立ち上がり、丸っこい後ろ姿を追いかけて事務室を出る。「ワン・フォー・オール、オール・フォー・ワン 片山製作所」というプリントが背中に入っている。入社当初に意味を尋ねられ、一人はみんなのために、みんなは一人のために、と答えたところ、怒られた。「最後の『ワン』は『勝利』の意味だ。つまり、一人はみんなのために、みんなは勝利の

ために。チーム一丸となって、目の前にある勝負に立ち向かっていく精神を表わしている。どうだ、美しい言葉だろう。元ラグビー日本代表選手の受け売りだけだな」

ラグビーやってたんですか、と訊くと、ボールに触ったこともないし、ルールもよく知らないという。片山は一事が万事、そんな調子だ。

実験器機の並んだ中央部を通り抜け、さきほど覗いた会議室に入る。さらにその右奥のドアから社長室に入る。

「……失礼します」

とはいっても事務機が一つ、周りは書棚や段ボール箱で埋め尽くされた四畳半の部屋だ。イメージ的には、小さな小さな古本屋といったところか。ちなみに梢恵のいる事務室は八畳ある。この社では、ヒエラルキーと占有スペースの大小は必ずしも比例しないことになる。

「まあ、座れ」

「はい」

社長室内に座れる場所はないので、梢恵だけ会議室にはみ出す恰好になる。すぐそこにあったパイプ椅子を引っぱってきて座る。

片山は、机の向こうに立ったままだ。

「梢恵。お前、この本を知ってるか」

散らかった机から片山が取り上げたのは、一冊の古ぼけた文庫本だった。メガネの位置を直してよく見る。

表紙には川面かわもに浮かぶ屋形船、日本髪に着物の女のバストアップ、それと普通にロングヘアの女の横顔が描かれている。なんだろう。時代小説だろうか。

「……おおえど、しんせん、でん？」

作者は石川英輔えいすけとなっている。

「そう、『大江戸神仙伝』。ヨウスケという、製薬会社で研究員をしていた男が、どういうわけかタイムスリップして江戸時代にいつちまう、って話だ。まあ、一種のSFと違っていいだろう。ヨウスケは貧しくもどこか懐かしい江戸人の生活に感激し、また自身は薬品に精通してるもんだから、その時代で入手可能な材料を駆使くしして、たとえば脚気かっけとか、江戸人の病気をいろいろ治してやる。やがて辰巳たつみ芸者のイナキチと恋に落ち……まあ、大まかにいうとそういう展開だ。どうだ、なかなか夢のある話だろう」

夢の有無はともかく。

「それって最近、テレビドラマでやってたやつですか」

片山は、いきなりその文庫本を机に叩きつけた。

「バカヤロウツ、あれの原作漫画は二〇〇〇年かそこらのもんだ。石川先生のこれはな、いいか」



かと思うと両手で丁寧おくづけに拾い上げ、巻末の奥付を確認する。

「……一九七九年刊行、二十年以上も早はええんだぞ。そこんとこテメエ、よく覚えときやがれ」

片山は普段こんな喋り方をする人ではない。とにかく影響されやすい性格をしており、周りの人間は何かと振り回される破目はめになる。

「はあ……で、その本がなんなんですか」

写楽しゃらくの浮世絵のようにひん曲がっていた顔が、ふいに元に戻る。

「お、おうよ。俺っちがいたかったのはそんなことじゃねえ。この本の何が素晴らしいってな、現代人の目を通して江戸時代を描いてるって、そこんとこよ。たとえば普通の時代小説みてえに、江戸人の目を通して江戸時代を描いたとする。でもそれじゃあ、普通の生活は当たり前のこととしか映らねえだろう。ところがそれを現代人、ヨウスケの目を通して描くと、どうでえ。これが奇異と驚きと、発見と感動みに充ちた物語になるって寸法よ」

話の筋は分かったが、なぜ自分がこんな話を聞かされているのかはさっぱり想像もつかない。

「……分かりました。そんなに面白いんなら、私も読みます。貸してください」

「あ、この、薄らコンコンチキが。俺っちが聞いてえのは、そんなことじゃねえっていっ

てんだらう」

ならば、そのいいたいことを早くいってみてはどうか。

「そのヨウスケの目を通して描かれた江戸はな、極めてレベルの高いリサイクルライフを営む町だったんだよ。紙くず一枚、古釘一本無駄にしねえ。ポロ布だつて糞尿ふんにょうだつて、とことん使い尽くす知恵と技があつた。その最たるもんが……燃料よ」

どうだといわんばかりにアゴを上げてみせるが、どうでもいい、という感想以外、今の梢恵には持ちようがない。

それでも片山は続ける。

「たとえば菜種油なたねあぶらよ。江戸人は前年作った菜種油をその年の燃料とし、その年に収穫する菜種から翌年の燃料を作り出す。今ふうにいやあ、再生可能エネルギーによる社会生活つてのを実践していたわけさ、俺たちの祖先は。ところがいつからか、日本人は化石燃料に頼りつ放しの生活にどっぷり浸ひたかるようになってしまった。国内に油田なんて数えるほどしかねえんだから、供給のほとんどは海外に頼ることになる。でつけえタンカーに原油を積み込んで、遥はるか中東諸国から輸入しちゃあ、それを湯水のように使い続けてきたわけさ」

その方が便利だったからでしょ、と思つたが口には出さなかつた。

「昔はな、あと三十年で地球上の油田はすべて枯渴こかつするとか、いろいろいわれてたが、今

現在問題となってるのは、もはや資源がいつ尽きるかってことじゃなくなっちゃった……さて、現在問題となってるのは、なんだ」

馬鹿にしないでほしい。

「……二酸化炭素排出量とか、温室効果ガスとかでしょう」

「正解」

パチンと指を鳴らす。

「そこで、昨今さつこん注目されてる新エネルギーといえは？」

「えっ、昨今、ですか……太陽光発電とか」

「んん、それもいいけど、ちよいと違う」

「じゃあ、風力発電」

「発電から離れる。俺は燃料の話をしてただろ」

「燃料、ですか……じゃあ、天然ガス」

「もういい。正解は後回しにして、もう一つの重要な話をする」

マズい。無駄に話を長引かせてしまった気がする。

「一方で、日本の農業は現在、非常に危機的な状況にある。さあ、日本農業の問題点の、最も大きなものを挙げてもらおう」

江戸人の真似まねはもう気が済んだのか。

「農業問題、ですか……食料自給率」

「それも確かに問題だが、それはどっちかっていうと、食糧問題だな。いいか、俺はさっきまで、燃料の話をしてたんだぞ。そこを意識しろよ。さあ、日本農業の問題点、次は」

「ええと……農業？」

「小さくなった。問題意識が小さくなった。それじゃないやつだ。はい次」

「分かった、農協ですな」

「確かに農協というシステム自体は大きな矛盾を孕んでいるが、そっちじゃない。燃料だつていつてんだらう」

「分かんないですよ、そんなこと急にいわれたつて」

あと、なんだろう。何があるだろう——。

「……あ、もしかして、あれとかですか？　なんていうんでしたっけ、ほら、あんまり、おコメ作り過ぎぢゃいけないやつ」

「そう、減反政策、それッ」

また指パツチン。意外と正解。

「もうちょっと正確にいうと、米価を安定させるために導入された生産調整政策、つてことな。さあ、俺がさっきした燃料の話と、今の減反を組み合わせると？」

「え、なんだろう……休耕田？」

「それはちよつと言いい回しを変えただけな。減反によつて食用米の作付けができなくて、結果的に何も植えられなくなったのが休耕田だから。そうじゃなくて、その休耕田に、なんだ」

「えっ……燃料を、撒まくんですか」

「撒いてどうする。田んぼにガソリン撒いたら、土壤が汚れちまうだろう」

「えーっ、分かんないですよ」

「あるだろう、ほら、ナントカ、ナントカ」

「えーっ……休耕田、ライフ」

「休耕田で暮らしてどうすんだ。カエルかお前は」

「えー、休耕田……」

片山がかぶりを振る。

「休耕田で言葉を作ろうとするな。間違つてつから。全然違うから」

「えー、ナントカ、ナントカ」

「そう、ナントカ、ナントカ」

「なんだろう……ナントカ、ナントカ」

「ええーい、面倒くせえ。バイオエタノールだよ、バイオ、エタノールッ」

結局自分で正解をいうのなら、最初からクイズ形式になんてしなければいいのに。

「はあ……バイオエタノールが、どうかしましたか」  
ぽかん、と片山が馬鹿にしたように大口を開ける。

「……どうか、つてお前、だって、そこにある装置」

「へ？」

「会議室出たところにあるやつ」

「なんか、ありましたっけ」

「ありましたっけ、じゃねえよバカッ。ちつとこい」

片山が、床に積み上げた書籍や箱を器用に跨またぎながらこっちに出てくる。梢恵は慌てて椅子から立ち、社長室のドア口から一步身を退ひいた。

「お前は、本当に与えられた仕事以外、関心がないんだな」

そう、吐き捨てるようにいった片山のあとをついていく。

「いえ、決してそんなことは……」

話題の装置というのは、確かに、会議室を出てすぐ左手にあった。

「ああ、これですか。そういえば、いつのまにかここにありましたね」

「勝手に棲すみついた野良猫みたいというな。これはな、俺が社運を賭けて発明した、エタノール等の溶剤類、脱水・精製装置だ」

装置、といっても鉄板で囲われたひと塊の機械ではない。ちょうどドア一枚分くらいの

金属フレイムに、蒸留装置じょうりゅうや分離膜を仕込んだモジュールパイプ、冷却器などを固定し、それぞれをガラス管やホースで接続した、いわば剥き出しむだ状態のガラス管迷路だ。

「……これで、その、バイオエタノールを？」

「そうだ。基本的に材料はなんだっていい。トウモロコシだってサトウキビだって、なんだったらそこらに生えてる雑草だっていい。要は糖質やデンプン質のある植物ならなんでもいい。まあ、分かりやすくコメで説明するとだな、最初にここ」

左下にある丸型フラスコを指差す。

「ここに糖化、発酵まで済ませた液体、つまり日本酒状態の液体を入れる。それを加熱し、この蒸留分縮器を通して高濃度のエタノール水蒸気にする。ここで冷却すれば、いわゆる焼酎しょうちゆうと同じ状態になるが、この装置はそれをしない。エタノール水蒸気のまま」

今度は上部に四本並んだ、白いアイスクャンディみたいな芯棒の入ったガラス管を示す。「この、ゼオライトを仕込んだ四本の膜分離装置に通し、一気にエタノール濃度を九十・五パーセントまで上げる。最後に冷却して集めると、それだけで純度百パーセントに近い無水エタノールができあがる、というわけだ」

さすがに、この程度の理屈は分かる。

「へえ、そうだったんですか」

片山は、カクツと首を折った。

「お前な、もつと話の先を読め。そして興味を持って」

そんな無茶な。

「俺がなんのために今まで、江戸の素晴らしいエネルギー循環システムについて話し、農業問題に触れ、今ここにあるバイオエタノール精製装置について説明したのか、考えてみる」

無理。

「……分かんないですって。なんでなんですか？」

「もつと真面目に考えろ」

ほんの数秒、腕を組んで考えてみたが、やはり痺れを切らしたのは片山の方だった。

「……分かった、もういい。結論からいおう。梢恵、お前にはしばらくの間、長野に出張にいらつてもらう」

「はあ、長野」

と自分で復唱してから、その意味が頭に染みてくる。

「えっ、長野？ しばらくって、何日ですか」

「それはお前が任務を完遂するまでだ」

「任務ってなんですか」

「お前、これがなんだか理解したか？」



またさっきの装置を指差す。

「だから、バイオエタノール精製装置でしょう」

「スタートの材料はなんだった？」

「糖質かデンプン質があれば、サトウキビでもトウモロコシでも、なんでもいいって」

「そんなもん、ここに生えてるか？」

「ああ、雑草でもいいって話ですか」

せっかく答えたのに、片山はさもダルそうに首を振った。

「それはものの喩<sup>たと</sup>えだ。雑草からバイオエタノールがそんなに効率よく採れるわけないだろ。……で、ここでようやく減反、休耕田の問題と絡んでくる。今現在、日本には埼玉県面積に匹敵するほどの不耕作地があるといわれている。水田に至っては、七〇年頃までは三百四十万ヘクタールあったのが、今はなんとその四分の三、二百五十万ヘクタールまで減ってしまった。それでもまだ米価を調整するために減反政策は続けられている。その、減った九十万ヘクタールすべてにというのは無理だろうが、その何分の一かでも、バイオエタノール用のコメを植えてくれれば、日本の抱えるエネルギー問題の助けになると思わないか？」

そういう訊き方をされれば――。

「……まあ、どっちかっていえば、思う方ですかね」

「よし、よくいったッ」

いきなり、目を突かれるかと思うほど強烈に指差される。

「そんな志いらいざしの高いお前こそ、長野出張に相応ふさわしい社員だ。任務そのものは極めてシンプルだ。長野の穂高村ほたかつてこの農協に知り合いがいるから、そいつに協力してもらって、一緒に休耕田を抱えている農家を回って、バイオエタノール用に安いコメを作付けしてくれるよう頼んでこい。一ヘクタールとか二ヘクタールとか、それくらいの単位でいい」

片山は斜め上を見上げ、ふわりと両手を広げた。

「そうして植えられたコメが収穫され、まあ、日本酒状態まではやってもらうとして……そこまでは誰だつてできるんだ。粉碎して酵素ぶっ込んで糖化させて、酵母こうぼで発酵させりゃいいんだから。最終的に作るのは燃料、味は関係ないんだから、とにかく発酵させりゃなんとかなる。そこまですきたらこっちの出番だ。この機械を運び込んで蒸留、脱水と。そうすりゃ、純度百パーに近いバイオエタノールができあがる。少なくとも、農家一軒が使うガソリン分くらいにはなる。……そう、農家の基本は自給自足だ。実にいいコンセプトだろう。上手うまくいったら農協にだつて売り込める。このシステムなら規模の拡大も、工業用への転用も自由自在だ。……うん、いい。これは実に有意義なプロジェクトになるぞ、

梢恵」

「はあ」

よくもまあ、一冊の小説からここまで妄想を広げられたものだ。  
ある意味、感心する。